

The usefulness of short-course prednisolone during the initial phase of an elimination diet trial in dogs with food-induced atopic dermatitis

Claude Favrot^{*†1} , Petra Bizikova^{†1}, Nina Fischer^{*} , Ana Rostaher^{*}  and Thierry Olivry[†] 

Introduction

- ・皮膚食物有害反応(CAFRs)は、犬の皮膚病で一般的な疾患である。
- ・犬のCAFRsの原因は、非免疫性(食物不耐性)と免疫性(食物アレルギー)が含まれる。
- ・食物誘発性アトピー性皮膚炎(FIAD)は食物アレルギーの1つであり、食物アレルギーがアトピー性皮膚炎(AD)の臨床的特徴である痒痒性の皮膚疾患を引き起こすことである。
- ・FIADと他のCAFRsの診断は、8~10週間の食物除去試験(EDT)に基づいている。
- ・長期EDTの問題点：偽陽性や偽陰性が出ることや、オーナーが積極的に持続させることができないこと。
- ・目的：プレドニゾロンをEDT初期に使用することで、診断までの期間を短縮できるかを検証する。

Methods and Materials

- ・症例：非季節性アトピー性皮膚炎の犬(組み入れ基準：表1)
- ・痒みの評価(図1, 表2)：PVAS10(1~10)とオーナーによる主観的なグレード評価(1~3)を毎週報告してもらう。
- ・EDTプロトコル(図2)
- ・食物負荷試験
 - EDT開始2週間前まで犬が食べていた市販のフードを、2週間続ける。
 - 痒み再発(PVAS>5、主観的なグレードが3)→負荷試験を中止し再度除去食へ→痒み改善(PVAS≤2、主観的なグレードが1)→FIADと診断。



Anallergenic/Ultamino
(Royal Canin)

Results

- ・症例：53頭のAD犬が組み入れられた(表3)。
- ・10/53頭(19%)で食物負荷試験行える基準に合致し、食物負荷によりADが再発し、その後に再度除去食にすると臨床症状が改善した。→FIADと診断
 - 負荷してから症状の再発が出るまでの中央値は3日(範囲：1-10日)
 - FIADであった犬のEDTの期間は中央値28日(範囲：28-44日)
- ・43/53頭(81%)では、FIAD犬よりも長くEDTが実施され(中央値：60日、範囲：54-70日)、元の食事に戻しても臨床症状が悪化しなかった→nonfood-induced AD(NFIAD)と診断

Discussion

- ・今回の研究では、グルココルチコイドで初期にアレルギーによる痒みや炎症をコントロールしていれば、EDT期間の短縮(早くして4週間で診断)が可能であることが示された。
- ・EDT初期でのグルココルチコイドの使用がprospectiveに研究されたのは本研究が初めて。
- ・プレドニゾロン未使用でも除去食に変更しただけで迅速な反応があったかもしれない。→未使用群との比較が必要であった。
- ・犬の食事アレルギーが診断できない理由(=長いEDTの期間をオーナーが積極的に維持できない)を解決できるが、EDTを進めるにあたりオーナーとの密接なコミュニケーションが必要になる。
- ・食物アレルギーの中でも、皮膚科学的症状以外の症状も同時に持つ犬での評価も必要。

批評

- ・コントロール群がないため、本当にプレドニゾロンで痒みスコアが減少しているかは分からない。
- ・FIADと診断するには試験期間の短縮が可能であったが、否定するためには従来と同じ期間(8-10週間)が必要になっている。
- ・他の除去食でも同様の結果が得られるか検証が必要。

〈表1〉 組み入れ基準

(i) ~ (vi) を満たす	(i) 基本的な診断基準を用いた非季節性ADと診断されている
	(ii) PVAS10のスコア3以上
	(iii) ノミの治療をしている
	(iv) 明らかな表在性or深在性膿皮症and/orマラセチア性皮膚炎(yeast dermatitis)ではない
	(v) 本試験1ヶ月間の詳細な食事履歴がある
	(vi) 食事の50%以上はドライフード
除外	局所or経口でのグルココルチコイド、シクロスポリン、オクラシチニブを休薬できない場合 アレルギー特異的な治療をしている場合

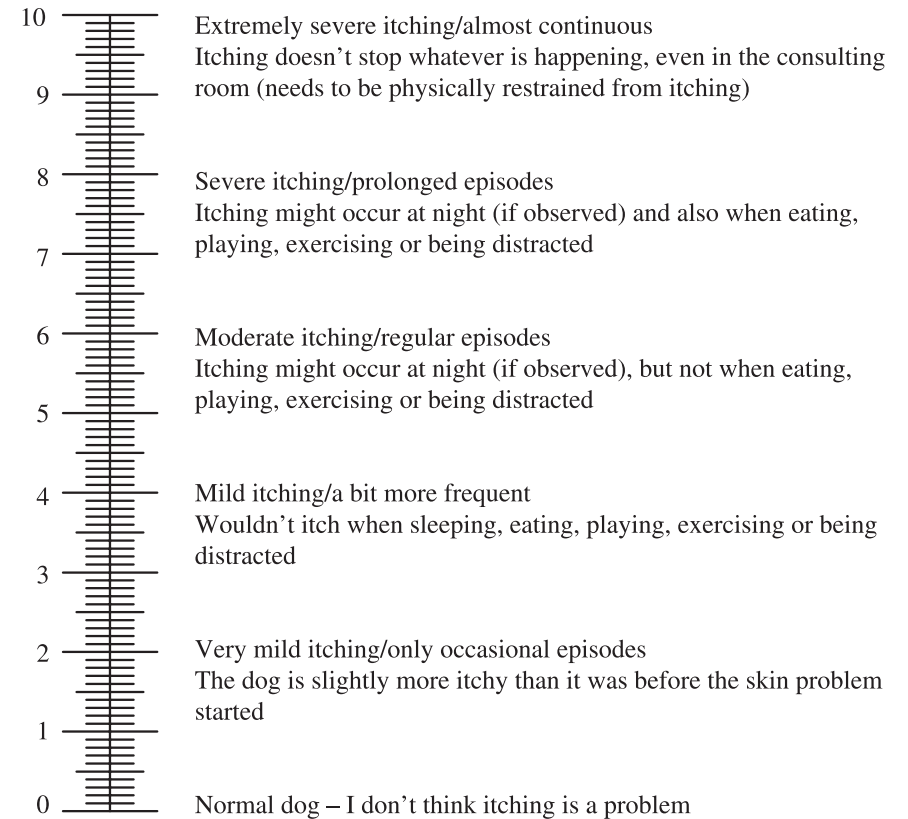
〈表2〉 痒みの評価(オーナーの主観的グレード)

1: コントロールできている。
2: 完全にコントロールはできていないがQOLは損なわれていない。治療の変更や診察は必要ない。
3: 全くコントロールできていない。QOLも損なわれている。治療の変更や診察が必要。

〈表3〉 結果

	Food-induced atopic dermatitis AD	Nonfood-induced AD
Number of dogs	10	43
Age [years; median (range)]	3 (1-7)	4 (1-10)
Sex (male:female ratio)	3:7 = 0.4	26:17 = 1.5
Pruritus score at the time of the 1st course of prednisolone	6.1	6.3
Duration of the 1st course of prednisolone [days; median (range)]	14 (14-21)	14 (12-30)
Number (%) of dogs having a flare of pruritus after the first prednisolone course	2 (20%)	43 (100%)
Time-to-flare of pruritus after stopping the induction course of prednisolone [days; median (range)]	7 (7-8)	10 (1-13)
Total duration of the elimination/provocation dietary trial [days; median (range)]	28 (28-44)	60 (54-70)
Time-to-flare of pruritus after the original food provocation [days; median (range)]	3 (1-10)	NA

〈図1〉 痒みの評価(PVAS10)



J. Rybníček et al., *Vet Dermatol*, 2009

〈図2〉 EDTプロトコル

